

司式 杉山昌樹牧師

奏楽 大日南苗香姉

前 奏

開 会 招 詞

\* 賛 美 歌 6 : 1

我らのみ神は天地すべます、国々しまじま喜びたたえよ。アーメン

\* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去ってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜びを再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この口は、あなたの賛美を歌います。主イエス・キリストの御名によって。アーメン。(詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

1. あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
2. あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
3. あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
4. 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
5. あなたの父と母を敬え。
6. あなたは殺してはならない。
7. あなたは姦淫してはならない。
8. あなたは盗んではならない。
9. あなたは隣人について偽証してはならない。
10. あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。(出エジプト20、申命記5)

\* 賛 美 歌 28 : 1

主よ、命の言葉を、与え給え、我が身に。我は求む、ひたすら、主より給う

御糧を。アーメン

共同の祈禱 祈禱書 35 伝道開始記念日(5月第一主日)

愛と恵みに富たもう父なる神さま、良い知らせを伝える者の足がこの町にもおとずれた

ことを感謝します。平和の福音を携えた伝道者たちが、走るべき行程を走り抜いてキリストに従ったように、わたしたちも彼らのあとに倣うことができますように。また、次々と起こされた信徒たちがキリストの証人となったように、わたしたちも、この町に福音を宣べ伝える働きを続けることができますように。

(イザヤ52、フィリピ3、使徒20・1)

献 金 (黒) 教会活動 (赤) 全国青年 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

聖書朗読 ヨハネ福音書21章1～14節 (新約聖書211頁)

説教・祈祷 「イエスの食卓」 杉山昌樹牧師

\* 賛美歌 101:1.2

1. いのちのいずみにましますイエスよ。豊かにながれて、うるおしたまえ。まことの言葉に、かわきしわれも。主の手にすがりて、よろこびすすまん。
  2. 神よりはなれて、まよいしわれを。イエスキみ見い出し、たまひし日より。めぐみにもれたる、ときはなかりき。すべての事をば、よきにしたまわん。
- アーメン

\* 主の祈り 祈祷書1

天にまします我らの父よ  
願わくは御名をあがめさせたまえ  
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ  
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ  
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ  
我らを試みに会わず 悪より救い出したまえ  
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

\* 頌 栄 67 主イエスのめぐみよ

主イエスのめぐみよ、ちちのあいよ、みたまのちからよ、あみさかえよ。アーメン

\* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 門脇献一長老 (司会・受付 次週：門脇陽子長老)

本日 受付 1階：古澤迪子・星野房子執事 2階：佐藤紀子執事 / ZOOMホスト・録音：大日南信也

次週 受付 1階：星野房子・藤井牧子執事 2階：那珂信之執事 / ZOOMホスト・録音：番場駿也

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ヨハネ21：1-14「イエスの食卓」

三回目？

今読みました聖書は実は謎の多いところですよ。たとえば、今日の最後の所14節を見ますと復活されたイエス様が弟子たちに現れたのはこれで三回目とはっきりと書いてあります。その前の2度とは先週一緒に読みました、復活の日の夕方とその次の週の出来事です。あの時、すでにイエス様は、弟子たちに平和を与えて下さって、大切な使命を与えて送り出してくださったのでした。ところが、今日読んだところでは、弟子たちはまるで初めに戻ってしまったかのように、イエス様のことすらわからないものとして描かれています。そもそも、前回エルサレムで12弟子に現れてくださったはずなのに、ここではペテロを中心に7人の弟子たちがガリラヤに帰ってしまっているのです。そればかりか、まるで昔に戻ったように、漁師の仕事を始められています。

エンゲライム

さらに、もう一つ不思議なところがあります。9節で弟子たちが船から下りてみますと、すでにイエス様によって食事の用意が整っていたとあります。その後、10節ではペテロが舟から一人で、153匹の魚の入った網を引き揚げて、しかもその網が破れなかった、という様子が描かれています。しかし、話のつながりとしては、むしろ9節から12節に飛んでイエス様との食事の場面にそのままつなげたほうがすっきりすると思われるかもしれません。けれども、ヨハネはどうしてもこれを書きおきたかったようです。その場合にこの153匹という数字や、破れない網、といった言葉にはそれなりの意味があるようです。例えば153匹という数字は、それをヘブライ語のアルファベットで表しますと、エゼキエル47：10に登場します地名エンゲライムと一致すると言われています。エゼキエル書では、それはすべてを生かす清い水の流れていく先です。あるいは、網が破れない、という言い方は教会の一致を表しているのではないかと、とも言われています。命にあふれて一致して生きていく教会というイメージでしょうか。しかし、このようにして、探偵のように謎ときをすることよりもっと大切なことがあります。それは、この所に書かれているままに聖書を読んでいきたいということです。その場合に、弟子たちは、あたかも元に戻ってしまったようだった、と書いてあるのですから、そのように読みたいのです。

元に戻る？

そしてそれは何も他人事ではないかもしれないのです。私たちもまた、礼拝で説教を聞くにしろ、聖書を自分で読むにしろ、聖霊なる神の導きを信じてみ言葉を向き合ってきたのです。そのみ言葉によってイエス様と直接ではなく、お会いしてきたのです。何度となくイエス様とお会いしてきたのです。それは事実です。けれども、そうであるにもかかわらず私たちは時に、イエス様を見失うことがあるのです。見失うまでは行かなくとも、イエス様が見えにくくなることもあるのです。とりわけ困難がある時がそうであるかもしれません。けれども、そればかりではなく、むしろ、色々なことが順調な時でも、あるいは、仕事や学びで多忙を極めている時こそがそうかもしれません。その関係では、この所で、ペテロたちが世俗の仕事に戻っている、ということはなんとなく親近感を感じなくもないのです。ここにいるのは偉大な使徒としてのペテロではなく、それ以前の「わたしは漁に行く」というペテロです。その仲間たちです。世俗の仕事に汗を流し、それがうまくいかない、そんなところから今日の聖書は始まっているのです。「私は漁に行く」と言い、仲間たちも「私たちも一緒にいこう」という、そうして以前そうしていたように夕方のガリラヤ湖に舟を出しているのです。

生活の中で

もちろん、これは当時の漁の常識に従った行動です。ガリラヤ湖の漁師であれば、昼間は魚は取れないとわかりきっていたようです。夜に漁するのが常識です。ところが、そのような漁師の知識に従って漁をしても何も取れず、空しく夜を過ごし、明け方岸边に舟を引き上げています。そこにイエス様が現れて下さるのですが、この事は、彼らがやはり、元のままではないことを表しているように見えます。以前の生活をそのまま続けているように見えて、決定的に何かが変わってしまっているのです。それは言うまでもなく、彼らの生活の中に、復活のイエス様が入ってこられるようになっている、という

事実です。これもまた、私たちにも同じようにあてはまるのではないのでしょうか。もちろん、このヨハネ書の記事では、ペテロたちは、最終的に使徒として、イエス様の良い知らせを宣べ伝えることに仕えるものとして、整えられていく、ということになりますから、全部が私たちのあり方と同じではありません。けれども、向かっている方向性が全く違うのか、と言いますとそうではありません。むしろ、プロとして、イエス様を宣べ伝えるかどうかはともかくとして、イエス様と一緒に生きていく、イエス様が切り開いてくださった道を歩いていく、という点では、プロであれ、アマチュアであれ同じです。私たちもまた、普段の生活があるのです。そこで忙しくしているのです。その場合に、うまくいったり、行かなかったり、浮き沈みがあるかもしれません。そこで、イエス様を私たちの歩みにお迎えするのです。そして一つになって生きていくのです。

### イエスが語り掛ける

そしてこのところでは、おそらくこれもまた私たちへの問としても聞けることですが、イエス様は、「何か食べるものがあるか」と問いかけておられるのです。このイエス様の言葉はちょっと細かいことを言いますと、食べ物としての魚があるかと問いかけているようです。そもそも、彼らは魚が全く取れなかったのですから「ありません」と答えるしかないのです。けれども、ここでもう一つ注目したい言葉があります。それは、「子たちよ」という呼びかけです。これは明らかに、この後の食事と関係しているように聞こえます。弟子たちはイエス様を見失っているのです。4節で「弟子たちはそれがイエスだとはわからなかった」とあります。丁度、マグダラのマリアが墓において、イエス様を目の前にして、イエス様だとわからなかったように、あるいはエマオに向かう弟子たちが、一緒に歩いているのがイエス様だとわからなかったように、この時7人の弟子たちもまた、目の前にいるのがイエス様であるにもかかわらずそうであるとわからなかったのです。そんなことがあるだろうかと思います。しかし、私たちにしましても、説教を聞きながら、心ここにあらず、という場合があります。あるいは、聖書を読みながら、どうも言葉が入ってこない、ということがあります。イエス様を見失いかけることが実際にあるのです。しかし、そこで、イエス様の方から「子たちよ」と呼びかけてくださるのです。そしてただそれだけではなく、ご自身を示してくださるのです。このところでは、右側に網を打つように指示されています。

### 事態が変わる－イエスとわかる

それは非常識なことです。何しろ朝なのです。朝に魚など取れるはずがないのです。やるだけ無駄なことだと、理性的に考えればわかることです。しかし、そのような常識をイエス様は覆されるのです。私たちはややもすると、私はこう思っている、というところから抜け出せないのです。そこにイエス様が来られるのです。ただ来られるだけではなく、きっかけを与えてくださるのです。このところでは、それは網を打つみなさいという命令でした。そして全く予想できない大漁によってまずはヨハネの目を開き、そのヨハネによってペテロやほかの弟子たちの目が開かれる、ということが起きています。その際大切なのは、ヨハネが「主だ」と叫んでいることです。短い言葉です。けれども、これはイエス様を見つけ出した人の叫び声です。そしてこれは私たち一人一人にとってもいつでも必要なことです。もちろん、私たちは、湖の湖畔で網を打つ必要はありません。最初からお話しているように、これはペテロたちがガリラヤ出身の漁師で、その生活の中で起きたことでした。同じように、私たちは、私たちの住むところ、暮らすところで、時にそれは東京のオフィスの中かもしれませんし、ふじみ野市や近隣の職場であるかもしれませんし、そこで行われている仕事も、全くそれぞれであるかもしれません。しかし、たとえそうであったとしても、そこで目を開かれる、そのようにしてイエス様に呼ばれることがあり得る、ということはこのところは示しているのではないのでしょうか。

### 食卓に加えられる

そして、この「主だ」という気づきから、この所はもう一つの話に移っています。それは、イエス様が用意された食卓に向かっていく、というあり方です。ペテロは、行動の人らしく上着を着こんで湖に飛び込んでいます。他の弟子たちは、そのまま舟で100メートル程度しか離れていなかったようですから、岸边にこぎよせています。そして彼らがたどり着いたところではすでに、炭火とその上にのせられたパンと付け合わせの魚が用意されていたのでした。イエス様は、このようにして、私たちをご自身の

食卓に招いてくださるのです。ところが、ここでは、イエス様は、それにさらに魚をくわえようと、言われます。これもまた不思議に思えます。ちなみに、イエス様が持ってこいと言われたのは、とても細かい話をしますと、食卓に供される魚です。それから、11節では、網一杯の魚が登場しますが、これは全く言葉通りの意味の魚です。それで、これは、私が勝手に思い描いていることですが、そのままの魚、ありのままの魚と、食卓に上る魚とはやはり違うのではないかと思うのです。そして、これは私たちのあり方の変化と結びついているように見えるのです。もっと率直にお話ししますと、イエス様ご自身は、神様の前にささげられたものである、という考え方がヘブライ書にあります（7：27「このいけにえはただ一度、ご自身をささげることによって、成し遂げたからです」）。

#### み後に従う

そして、私たちはイエス様に従う者です。ヨハネ福音書では、他の福音書のように、「自分の十字架を背負って私に従え」（マタイ16：24、その他）という言葉はありません。けれども10章ではわたしたちは、羊に譬えられています。「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」（10：27）。そして、イエス様に従う者と位置付けられています。その点ですべての福音書に、また私たちの生き方の基本的なところで変わりはありません。私たちは、イエス様に従う者として生きるように招かれています。それは、イエス様と一緒に、神様にささげられるものとなる、というあり方です。この教会そのものもまた、このささげものとして位置づけられるはずですが、もちろん、それは、わたしたちの人生を断念するという意味ではなく、むしろ、豊かにされる生き方として、自らを神様にささげていくということです。

#### イエスの食卓

そのようにして、イエス様を知っている私たちに向かってイエス様は「さあ、来て朝の食事をしなさい」と招いてくださるのです。また、ただ招いてくださるだけではなく、パンを間違って与えられ、さなかも同じように手渡された、とあるように、食卓の主人としてふるまってくださいます。このようにして、私たちは、イエス様の食卓に招かれ、その養いにあずかる者とされるのです。イエス様はこのようにして、私たちを、いつでも顧みて、ご自身の食卓へと招いてくださるのです。

#### 祈り

私の一切を知っておられ、愛してくださる父なる神様、あなたは私たちのために主イエスをお遣わしになり、そのいさおしにより、私たちをご自身の食卓へと招いてくださりますから感謝します。私たちは、あなたのみ前にありながらなお迷いやすいものであるかもしれません。しかし、イエス様は、そのような私たちをあなたとのまじわりに導き返してください。この招きに支えられ、そのまじわりの中で養われ、いよいよあなたと共に歩むものとさせてください。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン。